論文の和文要旨	
論文題目	通訳・翻訳プロセスモデルの検討 そのプロセスにおける明晰化ストラテジーを中心に ―ベトナム語–日本語の通訳・翻訳の場合を事例として―
氏名	グエン・ティ・ミン・ヴァン

本研究では、通訳・翻訳プロセスを検討するために、日本語–ベトナム語の言語ペアを事例に実際の通訳・翻訳データを調査し、様々な角度から分析・考察を試みた。データ分析に先立って、先行研究のレビューにより、既に提案された通訳・翻訳プロセス及びそのプロセスに関する議論の内容も含めて調査し、既存プロセスに関する指摘内容を参考に、且つ筆者の経験や予備調査の結果を踏まえ、そのプロセスに関する意見が分かれたところを克服できる、より詳細なプロセスを提案してみた。提案されたプロセスにおいて、特に注目するのはこのプロセスに発生する可能性がある問題とそれに対応するための「明晰化ストラテジー」である。通訳・翻訳プロセスにおいて発生する可能性がある問題としては、語彙レベルの問題、文法レベルの問題及び談話レベルの問題、発音レベルの問題（通訳限定）が挙げられる。それぞれの問題に対応するための「明晰化ストラテジー」が多用されているが、同じ問題でも対応の仕方、つまり明晰化ストラテジーの活用のあり方が異なる可能性が高いということから、通訳・翻訳プロセスは基本的には動的なプロセスであるという認識ができる。この認識を確認するために、ベトナム語–日本語の通訳・翻訳データを使い、明晰化ストラテジーの活用を中心に、必然性、活用レベル、利用目的といった 3 つの観点から、明晰化ストラテジー活用傾向の異同を観察した。具体的には、訳出形態ごとの訳出者別や訳出方向別における明晰化ストラテジーの活用傾向の特徴を調査した上で、訳出形態間の類似点・相違点を分析・考察した。特に、考察にあたり収録した通訳・翻訳データに基づくだけで判断しづらい点については被験者への意識調査で最終的な確認を行った。最後に、明晰化ストラテジーによる訳出プロセスへの影響を評価するために、アンケート調査を行った。このアンケート調査の結果を通じて、明晰化ストラテジーの全体効果及び、明晰化ストラテジーの効率の良い活用方法を確認することができる。これは通訳・翻訳プロセスにおける明晰化ストラテジーの重要な位置づけの実証及び通訳・翻訳者の教育養成への示唆に繋がるとも期待される。

以上の研究内容は 10 章の論文により構成されている。この 10 章では本研究で取り上げられた 3 つの研究設問への回答を見つけ出すために、様々な分析と考察の取り組みが行われた。以下、3 つの研究設問を提示した上で、各章の内容を概観しながら、それぞれの章で研究設問への回答として発見された結果を中心にまとめる。

1. 明晰化ストラテジーは日本語–ベトナム語の通訳・翻訳プロセスにおいて発生する可能性がある問題に対処するストラテジーとして活用されているか。どのようなストラテジーが見られるか。
2. 明晰化ストラテジーの活用は訳出者（a)、訳出方向 (b)、訳出形態（c)によって、どのように異なるか。類似点はないか。
3. 明晰化ストラテジーの活用のあり方によって、通訳・翻訳プロセスの最終的な目標であるコミュニケーション目標達成がどのように影響されるか。

第 1 章は先行研究のレビューと本研究の目的・意義の説明である。本研究の背景理論は Seleskovitch (1968,1978)の「意味の理論」(Theory of Sense)である。この理論の「言語による表現の意識的な放棄」、いわば非言語化という主張に対し、賛成の立場をとる研究者とは別に、反対の立場や中立的な立場をとる研究者もある。反対の立場や中立的な立場を取る研究者の両者ともある。Seleskovitch の「意味の理

論」を検証する余地があるという認識から、本研究では先行研究を踏まえながら、通訳・翻訳プロセスモデルを提言し、 提言する通訳・翻訳プロセスモデルを実証することを目的にした。そして、この章でも訳出プロセスの全体図を提案した。続いてそのプロセスに関わる様々な要素や訳出プロセスを左右するそれぞれの要素の可能性について触れた。その上で、 複雑なシステム（Complex System）及び Levelt (1999a)の「 Speech Production」と訳出プロセスの類似した特徴から、訳出プロセスの複雑、且つ動的な性質及びこのプロセスに発生する可能性がある文法レベルの問題、語彙レベルの問題、談話レベルの問題、発音レベルの問題を想定した。それぞれの問題に対処するストラテジーの中で、「明示化」ストラテジーが重要な役割を果たすことも確認できた。**つまり、研究設問 1 の一部に対する回答がこの章で得られた。**

第 2 章では、本研究の目的に合わせて「明晰化」という概念を提言し、本研究で扱う明晰化ストラテジーの定義及び分類方法も紹介した。明晰化ストラテジーの分類は必然性、ストラテジーの活用レベル、利用目的という三つの観点から行われた。すなわち、必然性の観点に基づく分類では、「義務的なストラテジー」と「任意的なストラテジー」が分けられ、ストラテジーの活用レベルの観点では「文法レベル」、「語彙レベル」、「談話レベル」 があり、そして利用目的の観点では「意味明確化のため」と「目標テキストの自然さの確保のため」のようにストラテジーが分類できる。また、本章では、明晰化ストラテジーを左右する各要素の考察も行った。すべての要素を検討するのは困難であり、本章では訳出形態やペア言語の特徴の異同を考察すべき変数として概観した。

第 3 章では、研究方法について中心に説明した。分析・考察用のデータを収録するために、なるべくぶっつけ本番に近い通訳のビジネス場面を設定し、シミュレーションという形で通訳のデータを収集した。被験者は 6 名（通訳経験者）である。翻訳データに関しては、 通訳データと同様、ビジネス関係で技術的な専門用語があまり現れないような場面を設定した。通訳データと翻訳データを提供する人物は同一である。さらに、 データの信頼性を確認するためのフォローアップインタビューを行った。通訳と翻訳、訳出方向、通訳者・翻訳者同士の間で共通・相違の特徴が存在しているのにどの要因が関わっているかを探求するための意識調査を行い、明晰化ストラテジーの効果の調査もアンケート形式で実施した。特にアンケート調査では「日本語が分からないベトナム人」、「ベトナム語が分からない日本人」、「日本語・ベトナム語に精通するベトナム人」という三つのグループに分けて、合計 60 名に対し、原文や訳出文を提示し、5 段階評価の形式で効果を評価してもらった。

第 4 章では、本研究で観察できた 17 の明晰化ストラテジー（主体の明示化、前置き表現の活用、原文の構成変更、反復、性別の明示化、指示語の意味明確化、指示語の付加、暗示された情報の復元、程度副詞の付加、説明の追加、複数の類義語の活用、接続詞の付加、読み手・聞き手に馴染みのあるような表現への変換、テンス・アスペクトの変換・具体化、原文の不自然さに対する処理、形式名詞の具体化、英語（表記）の併用による誤解防止）の実際の使用例を列挙した。**これは研究設問 1 の回答になった**。

第 5 章は、通訳データを分析・考察した。**この章では研究設問 2 の焦点（a) である「通訳者による明晰化ストラテジー活用の類似点・相違点は何か？」について触れた**。通訳者によって明晰化ストラテジーの活用傾向は大きく異なる。例えば、ストラテジーの活用頻度については通訳者による

大きな違い（75 回〜145 回の変動幅）がある。明晰化ストラテジーごとの活用特徴、性質についても、通訳者・翻訳者によって違いが見られた。しかし、その一方、 明晰化ストラテジーの活用は通訳者を問わず、同じ傾向になるところもある。まず、明晰化ストラテジー活用の全体傾向については、ほぼ通訳者全員に共通するものとなっている。通訳者全員が活用した明晰化ストラテジーは大半が任意的な性質をもち、文法レベルの活用が少なく、談話レベルでの活用が大半であるほか、主な利用目的が意味明確化のためであるということが共通点である。共通か相違のある活用傾向になるかは、通訳者の意識・意図によるところが多いということが被験者への意識調査で確認できた。また、**研究設問 2（b）への回答も 5 章で見い出した**。越→日方向における明晰化ストラテジーの出現頻度が日→越方向の出現頻度を上回っている（393 回対 272 回）。そして、明晰化の性質についても通訳方向によって大きな違いがあり、越→日の方向における義務的な活用率はわずか 2%であるのに対し、日→越の方向におけるこの割合は 31%にも及んでいる。その要因として考えられるのは、義務的な性質が強い「主体の明示化」と「読み手・聞き手に馴染みのあるような表現への変換」という二つのストラテジーが日→越通訳方向で多く活用されたためである。一方、方向に関わらず談話レベルでの活用が多く、且つ任意的な活用が全体的に多く、「意味明確化のため」 が大半を占めているという共通点も確認できた。

第 6 章では、 翻訳データを分析・考察した。**この章では研究設問 2 の焦点である「訳出者（a）や訳出方向（b）による明晰化ストラテジー活用の異同 」について触れた**。翻訳者全員に共通して活用割合が多いのは、「主体の明示化」、「読み手・聞き手に馴染みのあるような表現への変換」である。「原文の構成変更」、「説明の追加」、「テンス・アスペクトの変換・具体化」も全体的に比較的高い割合を示しているが、翻訳者間でははっきりしたばらつきが見られる。利用目的については翻訳者全員が共通した傾向を持つが、必然性は翻訳者による違いが見られた。そして、明晰化の活用レベルについても、翻訳者間で更にはっきりした分化が見られる。翻訳方向については、明晰化活用の大きな違いが観察できた。明晰化の出現回数も異なり、明晰化ストラテジーごとの活用特徴に関しても大きく異なる。「英語（表記）の併用による誤解防止」、「形式名詞の具体化」、「性別の明示化」並びに「主体の明示化」は日→越の翻訳方向にしか現れなかった。これは、日本語とベトナム語の根本的な特徴の相違により発生した結果である。

第 7 章では、訳出形態による明晰化ストラテジーの異同はどうか、すなわち設問 2（c）への回答を検討した。訳出形態を問わず、共通となる一番大きな特徴は通訳・翻訳プロセスにおいて普遍性が高いストラテジーである「説明の追加」、「原文の構成変更」が著しい存在を持っているということである。また、同様に低い比率で活用されたストラテジーのグループには、「性別の明示化」、「指示語の意味明確化」、「指示語の付加」、「程度副詞の付加」、「英語（表記）の併用による誤解防止」が含まれており、どちらの訳出形態においても、出現率が 3%以下である。一方で、 活用された明晰化ストラテジーの種類から明晰化ストラテジーの出現割合、必然性、活用レベルに至るまで、様々な側面から違いが見られた。特に注目すべき相違点の一つは明晰化ストラテジーの必然性である。通訳において活用された明晰化は任意的なものが大半であるのに対し、翻訳の明晰化ストラテジーでは義務的な活用率が任意的な活用率を上回った。活用レベルにおいても想定外の目立った違いがある。

第 8 章では、明晰化ストラテジーの効果調査結果を分析・考察し、研究設問 3 に対する答えを見い出した。通訳・翻訳に対する評価平均点がどちらも 3 点以上（5 点満点）であることから、

「明晰化ストラテジー」が全般的には肯定的な効果をもたらすものだと判断できる。また、通訳と比べ翻訳に対する評価点が良い傾向にあることもこの調査結果により明らかになった。一方、調査対象者によって、評価がかけ離れたところも多くあった。 評価が最も良かったのは、「日本語が分からないベトナム人」グループで、最も厳しかったのは「日本語・ベトナム語に精通するベトナム人」であった。この結果で明晰化ストラテジーの重要な役割が実証できた一方、このストラテジーの否定的な面も考えさせられた。

第 9 章では、分析・考察の結果を全体的に振り返った。その結果、設定された研究設問が解明できたほか、本研究で提案された通訳・翻訳プロセスモデルは実際に行われるプロセスに合致していることも確認できた。また、ベトナム語–日本語に特有な通訳・翻訳プロセスモデルも提案した。

第 10 章では、研究成果の貢献価値について確認した。本研究の成果は学術的な研究及び実践応用のいずれにも貢献できるものであると考える。なお、本研究の範囲では、調べきれないところもまだ多数ある。例えば、ビジネス以外の場面に見られる明晰化は今回のデータでは観察できないこと、サンプルの母数が理想的な数ではないこと等の制限があった。これらを今後の課題として引き続き取り組んで行きたいと思う。